

63 Dipyridamole 負荷心筋シンチにおけるびまん性 washout 低下の臨床的意義
 米沢嘉啓¹, 浜重直久¹, 土居義典¹, 楠目 修¹, 近森大志郎¹, 小沢利男¹, 赤木直樹², 吉田祥二², 前田知穂² (1 高知医大老年病科, 2 同放射線科)

Dipyridamole 負荷心筋シンチにおけるびまん性 washout の低下(DSW)の意義について検討した。DSWは、可逆性または固定性欠損像を認めた 429 例中91例(21%)に認められた。冠動脈造影では欠損像に DSW を伴った 69 例中 58 例(84%)が多枝病変であったのに対し DSW を伴わない 215 例では 61 例(28%)が多枝病変であった。また、多枝病変の 119 例中 58 例(49%)が DSW を伴っていた。欠損像を認めない 242 例では DSW は 14 例(6%)に認められたが、重症冠動脈病変は稀で予後も良好であった。DSW は欠損像に伴うときは重症冠動脈病変が疑われるが、欠損像のないときは必ずしも重症病変を意味しない。

64 Dipyridamole 負荷心筋シンチ陰性の臨床的意義
 楠目 修¹, 浜重直久¹, 米沢嘉啓¹, 土居義典¹, 小田原弘明¹, 近森大志郎¹, 小沢利男¹, 赤木直樹², 吉田祥二², 前田知穂² (1 高知医大老年病科, 2 同放射線科)

Dipyridamole 負荷心筋シンチにおいて欠損像陰性の臨床的意義を検討した。671 例中 242 例が欠損像陰性であった。冠動脈造影は 242 例中 91 例に施行したが、85 例(93%)は正常冠動脈を示した。平均 24 ヶ月の経過観察で欠損像を認めた 429 例中 41 例(14%)の心臓死、11 例(3%)の非致死的心合併症を生じたのに対して、欠損像のない 242 例では 3 例(1%)の心臓死、3 例(1%)の非致死的心合併症のみであった。欠損像陰性例では器質的冠狭窄は稀で予後も比較的良好であり、冠攣縮などに対する十分な内科的治療を行えば、必ずしも冠動脈造影は必要ではないと思われた。

65 ¹³³Xe による局所冠血流予備能の評価
 —ジピリダモール負荷による検討—

片平敏雄, 杉原洋樹, 稲垣末次, 窪田靖志, 中川達哉, 勝目 紘, 中川雅夫(京都府立医大 二内)
 虚血性心疾患の評価には冠動脈狭窄の形態学的判定が必須であるが、機能的な局所冠血流量(r-CBF)および冠血流予備能の把握も重要である。そこで、¹³³Xe により r-CBF を測定し、ジピリダモール(Dip)負荷時の反応を検討した。胸痛症候群および虚血性心疾患患者を対象とし、RI 管理区域内設置心臓カテーテル検査室内で、コントロールおよび Dip 負荷時に左冠動脈内に¹³³Xe 約 10mCi を注入し、局所クリアランスカーブより Cannon らの方法に準じ r-CBF を測定した。コントロール時の r-CBF は非狭窄部位で Pressure Rate Product と相関した。Dip 負荷により非狭窄部位の r-CBF は 2-2.5 倍に増加したが、高度狭窄部位では増加の程度が少なく冠血流予備能の低下を示した。

66 心筋断層像からみた虚血性心疾患における虚血誘発の差異について—ergometer, dipyridamole, 心房 pacing 負荷での検討—

徳永 毅, 藤原秀臣, 新田順一, 雨宮 浩, 青沼和隆, 家坂義人(土浦協同病院循環器内科), 広江道昭(東京女子医大放射線科)

目的: 虚血誘発における臥位 ergometer 負荷(E法), dipyridamole 負荷(D法), 心房 pacing 負荷(P法)の差異を検討した。方法: 虚血性心疾患 28 例に E 法と D 法(12 例), E 法と P 法(16 例)を施行し, Bull's eye map による誘発虚血の判定, 臨床所見を検討した。結果: 胸痛・心電図変化の出現頻度では, E 法での ST-T 変化のみ 50% を越えた。収縮期血圧は D 法, P 法で有意に低下した。有意狭窄中虚血誘発率は E 法 31/36(86%), D 法 10/11(91%), P 法 22/25(88%)であった。総括: 3 種の負荷法の間に虚血誘発率において差異は認められなかった。

67 川崎病患児における運動負荷及びジピリダモール負荷心筋 SPECT の評価

宮川正男, 村瀬研也, 松本修平*, 新野正治*, 望月輝一, 東野博, 棚田修二, 飯尾篤, 浜本研(愛媛大学放射線科)* (同小児科)

心エコー(2DE)にて冠動脈瘤を過去に指摘されたことのある川崎病患児 112 例に、運動負荷(53 例)及びジピリダモール負荷(59 例) 201-Tl 心筋 SPECT を行ないその所見を選択的冠動脈造影の所見と対比検討した。SPECT 視覚法で sensitivity 92%, specificity 98%, accuracy 96% と良好な結果が得られた。Bull's eye map の定量評価を併用すると狭窄冠動脈の推定も可能であった。狭窄性病変を有する 12 症例で 2 年から 4 年後の follow up study を行ないやはり CAG との対比で良好な結果が得られた。患児長期観察に負荷心筋 SPECT は必要不可欠と思われた。

68 イソプロテレノール負荷タリウム心筋 SPECT の有用性と安全性の検討

相澤信行, 原 芳邦, 金 國鐘(茅ヶ崎徳洲会病院循環器内科), 三井民人, 山崎愉紀(同放射線科), 鈴木豊(東海大学放射線科 I)

イソプロテレノール負荷タリウム心筋 SPECT (以下 ISO-Tl シンチ)の有用性と安全性を検討した。対象は虚血性心疾患を疑った患者 190 名。ISO-Tl シンチはイソプロテレノールを最高 1mg/kg までを持続静注後に Tl-²⁰¹mCi 静注し SPECT 撮影をした。冠状動脈造影から判断して心筋梗塞のない患者の狭心症の検出は、感度 89%、特異度 94% であった。心筋梗塞後の患者を含めて合併症は心房細動 4 例(2.1%)、新たな期外収縮 8 例(4.2%)、低血圧 3 例(1.6%)、振戦 4 例(2.1%)等で重大な合併症はなかった。以上より ISO-Tl シンチは安全かつ簡便で虚血性心疾患の検出に有用である。